

ひらいた門

見よ。わたしは、だれも閉じることのできない門を、あなたの前に開いておいた。なぜなら、あなたには少しばかりの力があって、わたしのことばを守り、わたしの名を否まなかったからである。 黙示録 3 : 8

VOL.02-06 NO.015 2010年06月

チャーチ・オブ・ゴッド

川崎南部キリスト教会

〒210-0025 川崎区下並木66

TEL&FAX 044-233-3648

Eメール：nanbu-kyokai@nifty.com

URL：<http://homepage2.nifty.com/nanbukyokai/>

「祝福となる存在」

橋本幸夫

「私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、神の前にかぐわしいキリストのかおりなのです。」

(Ⅱコリント 2 : 15)

人々に対する私たちの価値判断の基準は、その人が〈どんなことができるか〉と言う能力的な側面に置かれやすいものです。だがそれ以上に、その人が〈どうあるか〉が問われる場合があります。前者を〈行為価値〉、後者を〈存在価値〉と呼ぶことができます。

ある伝道者の話です。混み合う東京駅で靴をみがくおじさんは、忙しくてその靴を履いている人がどんな人なのか見るとまもありません。やっと順番が回ってきてみがき終わると、このおじさんがフト顔を上げて次のように云ったというのです。

〈あなたの靴をみがいていると不思議にいつまでもみがいていたくなります。さっさと終えてしまいたいとか、みがきたくないなあという気持ちにさせるお客さんもいるのに…。失礼ですが、何をしておられるかたでしょうか〉と。

私はこの話を聞いて非常にオモシロイと思いました。人にはその人なりの雰囲気があり、漂っているということなのです。ちなみにその伝道者は内住のキリストに生き、キリストのかおりを放っておられる方でした。

〈あの人のすることは間違いないが…〉
〈説教はすばらしいが…〉と人々が言う時、〈何かをする〉という行為的な価値よりも〈どうあるか〉という存在的な価値が問題とされるのです。そして実に人は、本来この有様に根元的な親しさを感じるものようです。人は目で見ると同時に心で見えるものだからです。

前者はより動的であり、後者はより静的です。そして私たちの中で互いに相反するものではなくて、より総合的・調和的な方向に進んでいかなければなりません。活動的な若き日はあまり〈存在価値〉に重きを置かないものですが、信仰の成長、成熟とともに次第に問われるものが異なってきます。

私たちは奉仕と同時に、キリストのかおりと呼ぶにふさわしい麗しさを兼ね備えていきたいものです。